

## 第2回 武蔵野市子ども自然体験委員会

日 時：平成16年1月20日（火）  
18時30分～21時00分  
場 所：武蔵野公会堂 第4会議室  
出席委員：安藤委員・石井委員・梅田委員・川住委員・鈴木委員  
高石委員・永田委員・宮寄委員・藁谷委員  
武蔵野市：事務局 子ども家庭部長・教育部長 ほか12名

### 1. 開 会

梅田 委員長

今回の議題に入る前に、前回第1回（12/15）の議事録について、発言内容等のご確認をお願いいたします。

（事務局）

なお、会議の議事録については、市のホームページ上に公開していきたいと考えております。その際に、委員の皆様のお名前表記については、原則実名でよろしいでしょうか？

委 員 実名で問題ありません。

（事務局）

会議の内容により、かなり突っ込んだご意見等があった場合には、そのつどお聞きしていきたいと思っております。

### 2. 事務局自己紹介

（前回出席した者については省略）

子ども家庭課長（水野）・野外活動センター長（渡辺）

緑化環境センター係長（笠原）・児童館館長（鈴木）・児童館職員（内藤）

### 3. 市で実施している自然体験事業について

梅田 委員長

それでは、今回の議題である「市で実施している自然体験事業」について、事務局よりご説明願います。前回の宿題でもありました「市内のビオトープ」についても、その中でお願いいたします。

なお提案がございます。事業一覧表にもありますように「今後の課題」については、担当課で挙げるのは難しいとは思いますが、大事なことで、問題点を忌憚なく本音で言っていただきたいと思っております。

#### 事業説明

子ども家庭部児童青少年課

子ども家庭部子ども家庭課

教育部指導課

教育部生涯学習スポーツ課

野外活動センター

緑化環境センター

永田 委員

ビオトープを一ヵ所造成するのにかかる費用は？環境省の補助金は？

緑化環境センター長

300～500㎡のビオトープで事業費が900万円かかります。そのうち環境省の補助が1/3です。学校ビオトープは、水源の確保のため、全てにおいて20～30mの井戸を掘り、地下水の活用をしています。また、公園ビオトープについては、災害時にも活用できるよう、100mの井戸を掘り、より飲み水に近い地下水を活用しています。

千川小学校のビオトープは、他の3倍の1600㎡です。これは、たまたま学校の向いに市有地があり、整備したものです。

安藤 委員

『プレセカンドスクール』は、『セカンドスクール』を始めた段階から計画されていたのでしょうか？それとも始めてみて発想されたものなのでしょうか？

指導課長

後者の始めてみて発想されたものです。『プレセカンドスクール』を実施した目的は3つあり、

5年生の長期間にわたる『セカンドスクール』の前に、4年生で1回宿泊体験学習に慣れてもらうこと。

『セカンドスクール』での学習課題の発見に役立てること。

『プレ』『本番』が一緒の場所で実施する場合、2ヵ年かけての交流ができること。

です。

藁谷 委員

例えば『セカンドスクール』を実施する場合、学校の教員への指導・自然体験に関する研修などは行なっているのですか？

指導課長

特に実施しておりません。平成14年度に『セカンドスクール充実検討委員会』を立ち上げ・検討したほか、各学校で積み重ねたノウハウをそれぞれで伝えていくというような状況です。

梅田 委員長

3点ございます。

「事業のねらい」において、『家族・親子の絆を深める』というのが非常に多い。それはやはり、「現在の家族や親子にはそれが欠けている」と認識してとのことでしょうか？「市がやらなければならない」と認識した背景をお教えてください。

中学生・高校生に対するプログラムが少ないこと。

事業を実施しての、子どもたちの反応のご説明が少ないのでは？これからの自然体験を考えていくにあたって、知っておかないとならないと思います。

子ども家庭部長

武蔵野市では、「現代社会における子育ての困難さ」などの子どもを取り巻く状況を認識し、子ども施策に関しては、「全児童対策の理念」と、親子の絆を重視し、絆を強く太くすることに主眼をおいた子育て支援を基本的な報告とする「ファミリーフレンドリーの理念」を基本原則としています。

梅田 委員長

『家族の絆』は確かに薄らいでいます。どこかでそういう場を設けなければならない。

生涯学習スポーツ課長

『土曜学校』の場合、中学生の参加はゼロではないが、非常に少ない。ただ昔から継続している「むさしのばやし」のような事業は、非常に人気があります。という点で『土曜学校』に慣れ親しんだ小学生が、中学生になったときに期待ができますが、継続していく体制が課題です。

梅田 委員長

例えば、4～6年生と3年間『むさしのジャンボリー』に参加した子どもが、中学生・高校生になって「サブリーダー」として戻ってくる。その「サブリーダー」の役割はどういうものなのでしょうか？

児童青少年課係長

まず、児童青少年課で『中学生・高校生リーダー講習会』を開催しています。中高生などの青少年が地域で活躍する場所・きっかけ作りのために、様々なボランティア活動に必要な技術等を体験する講習会です。そのなかで、5～7月にかけて「野外活動におけるリーダーのあり方」「安全管理」「救急法」などを受講した子どもたちが「サブリーダー」として参加しています。実際に大人の指導者と参加児童との「良いパイプ役」のような役割となっていますが、中には「小学7年生」というように、お客さんになってしまう子どももいます。

石井 副委員長

私も3点ございます。

発表していただいた「自然体験プログラム」は、25事業ありますが、他の区市と比較して、どうなのでしょう？他の区市も相当の取り組みを実施しているのではないのでしょうか？

自然体験事業を実施している6部署の連携はどうなっているのでしょうか？

様々な自然体験事業を実施していますが、このような自然体験に積極的な方の傾向はどれも同じで、参加者も相当なところ重なっているのではないのでしょうか？

#### 子ども家庭部長

武蔵野市においては「野外活動センター」があるなど、全体としては豊富だと思っています。また、海外へのホームステイなどの交流事業は、他の区市でも実施していますが、ハバロフスクのような大自然のど真ん中での自然体験という事業は聞いたことがありません。自然体験事業だけにかかわらず、「子ども施策」に関わる部署が集まる会議があり、他の部署との情報交換等を行なっています。

#### 指導課長

『セカンドスクール』におきましては、武蔵野市のほかに、江戸川区が3校で5泊6日、沖縄県浦添市が2泊3日で、渋谷区でも1校、いずれも夏期休業中の実施で、本市ように教育課程で、9泊10日のような長期で実施しているものはありません。

#### 児童青少年課長

「リピーター」と言われる方々は、少なからずいます。例えば、『鳥取家族ふれあい長期自然体験』の参加家族58組のうち、3割は他の自然体験事業においても会ったことがあるような方々です。「意識が高い」「アンテナをはっている」方々で、悪く言えば「関心の高い親」と「親に喜んでついてくる低年齢の子ども」の家族が主体であるといえます。そして、中学生世代があまり参加していません。

#### 生涯学習スポーツ課長

『土曜学校』の各事業では、参加者のダブりは多少あります。現在は、学校を通じたPRをしています。今後はPRの仕方を工夫し、参加者の開拓をしていくことが課題といえます。

#### 梅田 委員長

逆を言えば、問題のない人々が参加しているということですね。

例えば森林は色々な機能をもち、そのような「自然の場」は、子どもたちに様々な影響を与えるものです。与えるものは一杯あるが、何を目的としてプログラムを組んでやっているのか？「ボヤけた」感じの自然体験をやっているのではないのでしょうか？具体的には、「堪え性を養う」ために、達成感をもたせるプログラム、その他「自然の仕組みを覚える」や「野生を取り戻す」などの『ねらい』があります。

自然という場をかりて、何を子どもたちに与える、獲得してもらうのかで、『ねらい』というものは違ってくるのではないのでしょうか。

藁谷 委員

同感です。指摘したいことの1点目は、「イベントになりがちだということ」です。『成果』にしても、「定員一杯に申し込みがあり、抽選となった」「参加者からは好評でした」が評価でしょうか？

2点目は、通期・通年で実施しているものが、かなり少ない。事業数は多いが、継続して子どもたちが見れる事業がどれだけあるのか？

また、体験した後の評価が挙げられると、いろいろな意味でもっと活かすことができる。

梅田 委員長

例えば、映画を観て、マネをするような一種の興奮状態であると思います。イベントをやれば、子どもたちは興奮状態になり、非常に喜ぶ。ただ一面的には、これは「大人の自己満足」であり、実際に子どもたちには何が残るのでしょうか？イベントが終了して3、4日経ち、元の木阿弥という感があるのでは？体力的な自信というのは1回の経験でも良いが、友情や思いやり、ましてや「自然に対する認識」というものは、1泊2日を1回というのではダメ。

鈴木 委員

『セカンドスクール』に長年関わってきた私の感じでは、子どもたちが自然と向き合う時は、「友達と一緒に」または「地元の方々と一緒に」向き合います。つまり、「自然を通して人との関わり方を学ぶ」ということであり、大きな成果があると思っています。実際に子どもたちにも変化がみられます。親以外の大人に可愛がられる経験があまりない現代の子どもたちが、ホームステイ先の方々と別れる時には声を出して泣きまです。東京に戻ってきてからも、『セカンドスクール』の話題が何ヶ月も続く状態にあり、秋に地元の方々が来訪された時には、まるで昨日まで一緒だったかのように、活発にコミュニケーションを図っています。地元の方々と親密に関われる現在の形式になったことで、『セカンドスクール』の内容も充実し、子どもたちにも「人とのコミュニケーションができる」という違った姿が見られます。

川住 委員

事業それぞれに、「友好都市との交流の一環での自然体験」などの目的やねらい・経緯があるはず。我々がこの会議で『野外活動を通じての自然体験』を考えていくにあたって、まず『自然体験の本来の目的・ねらい』を明確に挙げ、次にそれぞれの事業について検討していけばよいのではないのでしょうか？

子ども家庭部長

これまで、『自然体験』という尺度では、あまり体系だって議論されてはおりません。どんどんしていただきたいと思います。

自治体ができることは、『キッカケ作り』が中心にならざるを得ない傾向があります。

とにかく、「今できることをやらなければ、子どもたちが大変なことになるってしまう」という危機意識・問題意識があります。

梅田 委員長

何のためにジャンボリーに行くのか？本当に今のままで良いのか？『自然との共生』が目的であれば、トイレの虫等はそのままで良いはず。課題としては、指導者のことや費用の面などいろいろあるが、目的をしっかりとっておかないと、参加する子どもや親の考え方がおかしくなってしまう。

石井 副委員長

我々は、何のために集まってきたのか分からなくなってきましたね。武蔵野市は、特にこの20年は、子どもに対しての教育は熱心に取り組んできました。手は広げたけれど、その結果がこれです。部署間でも情報交換だけではなく、リンクして関連付けていかねばならない。

バリエーションの多い事業を用意し、ユーザーが選択できるやり方の場合においても、ある程度構造化させておく必要があり、この会議において、大枠を考えなければならない。

これが、これからの自然体験にどのように活かせるのか？どこまで体験する必要があるのか？など非常に悩むところであります。

永田 委員

『ビオトープ』の資料でガイドマップをもらったが、これでいかに「緑が多い」と呼ばれる武蔵野市でも、公園が少ないということができる。

今の子どもたちにとって、『自然体験』というものは非日常なこと。

子どもたちにとっては、楽しければ良いのではないのでしょうか。つまり子どもが楽しめる場を作ればよい。もちろん実施側が目的やプログラムを考えなければならないが、それぞれの部署が「理念」「目的」「効果」をすり合わせ、反省点を把握しなければならない。

特に、武蔵野市における自然体験事業の大きな柱の一つである『セカンドスクール』は、いわば半強制的形式で実施しており、大きな力があります。募集形式で行なう他の事業の積み上げを『セカンドスクール』にフィードバックするなどの方法が必要である。

#### 宮崎 委員

大人がお膳立てしすぎ、完成度高すぎると思います。それで、自分で何かをしたという達成感がない。そして、子どもたちが「安全」「自由」「自発的」に活動できるような場がありません。

ニュースで、東京のどこかにそのような公園があると聞いたことがあります。「1日自由に遊べる」「好きなものを作ってよい」など何をしても良い、これが本来の姿だと思います。安全なうえで自由があれば、わざわざ遠出しなくても良いのではとも思います。

また子どもが中学生にでもなれば、だんだんと親から離れていきます。そうなれば「他人とのふれあい」が一番必要です。そのような機会がもっと欲しい。

#### 高石 委員

例えば『むさしのジャンボリー』の4年生は、『セカンドスクール』の予行練習としての意味合いもあり、参加者が多い。このように同一事業によっても、目的がいろいろあって良いと思います。

また、『自然体験』も10泊、11泊というようなものだけでなく、2泊3日の短期間を繰り返す良さもあるはずです。そして体験するごとに、その目的も変化していきます。

#### 梅田 委員長

目的は表に出すわけではなく、「こういうことを学んで欲しいなあ」という舞台を作らなければならない。そうしないと山へ行っても過保護になってしまいます。

安藤 委員

今までの事業をあれこれと評価するのではなく、そこから新しいものを考えていく方向でなければならないと思います。

梅田 委員長

我々も全てを見てきたわけではないので、事務局側からももっと問題提起をしていただきたい。

今回は、委員の方から、「子どもたちには、こうしたら良いのでは？」という意見を挙げていく。『自然体験』の必要性は分かっているわけであるから、問題があるのであれば、それぞれの切り口で考えていく。

石井 副委員長

そして、『自然体験のあり方』と『その具体的な方策』はどうしたら良いのかという大枠を考えてくる。

子ども家庭部長

実施側も、参加者の反応というのは、アンケートぐらいでしか把握できていない。自然の絡みの中で、「今後どのようにしていけるのか？」、「何を糧にして、次に活かしていくのか？」を考えて、大きな曲がり角に立っているといえます。

『セカンドスクール』や『むさしのジャンボリー』といったメインの事業だけでなく、その他のイベント的な事業においても、こういう事業、このような関わり方、ビオトープを始めとした市内施設の利用から市の関わり方、提供の仕方を含め、指標となるような「こういう観点から見ではどうか？」というご提言をいただきたいと思っております。

石井 副委員長

そうして挙げられたコンセプトやテーマに従って、各部署がそれぞれ実施するのですか？それとも、大きなものを1つ実施するのですか？

子ども家庭部長

挙げられたコンセプトやテーマ・観点を、どこの部署で実施すれば一番適当であるか等、検討してきたいと思います。

川住 委員

「どういう観点・原則」「何を自然体験に通して活かしていくのか？」など、『大きな幹』をこの会議で議論していくべきだと思います。それで、この25事業に対して「ここをこうしたら良いのでは？」というような意見が出てくる。方向性が一致していないと、提言まで持っていけない。

梅田 委員長

達成感で、「自分に自信をもたせる」。火をおこす等の不便な世界を臨機応変に工夫することで、「たくましさ」を養う。その他、友達との付き合い方、思いやりの面というように自然を通じての効果は多くある。でも、そういうことをやるのでは、1泊・2泊ではダメ。ある時に熱中する期間がないと趣味に成らないように、継続的なものがが必要です。

また、こういうものを見る時の基準が必要です。「それぞれで何を学べるのか?」「自然体験で、何を求めているのか?」「何を期待しているのか?」「なぜ必要で、なぜ武蔵野市がやらなければならないのか?」などの切り口でディスカッションして、自然という場に子どもたちを生活させて何を得られるのかを、まず考える。

生涯学習スポーツ課長

「自然が非日常である今の子どもたちに対して、何が欠けていて、何が必要なのか?」。その意味では『土曜学校』においては、キッカケづくりとして成果をあげていると思われれます。例えば、「木の橋が渡れない」「ミミズがつかめない」という子どもが、『土曜学校』を経験してできるようになるケースもありました。非日常的なものが日常的になるキッカケとして、生きていくための基礎知識のような基本的なところも与えていければと考えています。

石井 副委員長

今の子どもたちは、何か欠けているのでしょうか?子どもたちは、ちゃんと持っている。そして、欠けているからダメなのではなく。「『自然体験』を通して何を学べるのか?」「何を楽しめるのか?」ということを考えていきましょう。

永田 委員

今の『ビオトープ』では、好きにメダカもザリガニも取れないんですよ。国分寺市では、草いっぱい自由に遊べた公園を整備してキレイにしたことが、子どもたちの遊びを奪ってしまったこともありました。

そのような施設よりは、例えば、使わなくなった小学校丸々を、好きに遊べるようにするなどの装置を作る、というような視点が必要と思います。そして、子どもたちを信用する必要もあります。

梅田 委員長

「キッカケ作りの後、その後をフォローする何かがあるのか？」という問題もあります。限られた予算の中で、系統的にどう育てていけるのか？

鈴木 委員

次回には、一度、自分たちの『子ども観』を発表しあうのはどうでしょうか？「何ができて、何ができないのか」など、まとまらなくても、それぞれに違う『子ども観』を一度話し合い、その視点・感覚等を参考にして考えていきたいと思います。

児童青少年課長

それでは、次回には、委員の皆さんが感じておられるそれぞれの『子ども観』を出し合いつつ、『自然体験』についての「何を？」「なぜ？」という『幹』の部分も、もう一度議論していただくことで、「このやり方が違う。」「これが欠けている。」というものが見え、あるべき姿がはっきりしてくると思います。

次回以降の日程について

第3回：平成16年2月9日(月)午後6時30分～

場所：市民会館 第1学習室

第4回：平成16年3月4日(木)午後6時30分～

場所：武蔵野公会堂 第1会議室